© Kawada Shinsyo Project

テキスト

遠方に／アートする美術覚書き

果たして「美術とは何か？」という問いに対して、どれくらいの人が答えることができるだろうか。 言葉を詰まらせる人、他の話題にすり替え答えを濁す人、雄弁に美術とは何かと語る人‥‥‥。けれども、それら答えが、依然、身近な存在、近くにいる聞き手にしか届かないものであるならば、それは限りなく沈黙に近い語り、言葉でしかない。 もしそうであるならば、僕たちは、そのような沈黙、言葉ではなく、より語ることとして、また、身近な存在よりも、遠方にいる、名づけられながらも無名に近い存在に向けて語る必要がある。

そして、僕たちはそのような語りによって、「美術とは何か？」という問いに対する答えを導き出し、同時に、美術それ自体を常に捉え直していかなければならない。

まえがき

この本は何と呼べばいいのでしょうか。一般教養としての新書本、あるいは美術の専門書、美術作家の日記、エッセイ、文学‥‥‥。私はこの本のための書き下ろしを美術に関わりながら、また、内容も美術に多くの事を触れながら書きました。そうであるならば、この本は美術の本として読まれるべきものになります。しかし、それは私の本意ではありません。確かに内容は美術について多く書かれていますが、しかし、それは美術の内容に触れているだけにすぎません。本書の目的は別のところにあります。

これまで私は美術作家として作品を発表してきました。そして、機会があれば展覧会会場に、また誌面に自らの文章を掲載してきました。しかし、それら文章は美術作家が思考を深めるための作業、作品解説程度にしか受け取られて来なかったように思います。そこには明らかに美術作家が書く文章への誤解と偏見、諦めがあります。

美術作家の書く文章、そう呼ばれてしまうことは仕方のないことですが、しかし、そこにはまた別の営みがあります。美術作家が書く文章、美術作品とは呼ぶことができない文章、別の表現、言葉。むしろ、それら文章は美術のために書かれたというよりも、遠く離れたところから美術を眺めるための、美術のためだけではない、別の目的を持った文章ということです。

ここに書き下ろされた文章は、美術に寄り添いながらも、美術以外へ向けて、ただ言葉としてあります。そして、そのような文章で構成された本書は、著者である私によって名づけられ、ここにあります。

しかし、本書はそのように名づけられながらも、無名のまま読者に届けられてもいます。なぜなら、本書をどう名づけるのかは著者の義務であり、同時に、本書を読む、読者の自由でもあるのですから。

モアベターな場所

細野晴臣という人がいる。知らない人にはＹＭＯのメンバーといえばわかるだろうか。テクノサウンドである。もっと知らない人には、イモ金トリオの「ハイスクールララバイ」を作曲／編曲した人といえばわかるだろうか。最近は多種多様な活動をしているのでここに挙げるのは避けるが、そんな彼の作品の中にトロピカル三部作と言われているものがある。

『トロピカル・ダンディー／TROPICAL DANDY』（1975年）、『泰安洋行／BON VOYAGE CO.』（1976年）、『はらいそ／PARAISO』（1978年）である。

いずれも70年代の作品になるが、この作品群、どこかねじれている。

この三部作は、トロピカル（オリエンタル）という欧米（西洋）から見た日本（東洋）の幻想をさらに裏返して、日本人がトロピカル（オリエンタル）のテイストを元に音楽をするということをコンセプトにしている。い

© Kawada Shinsyo Project

うなれば日本人が日本人を演じるということである。

細野自身はこのことに自覚的に、そして戦略的に展開していくのだけれども、僕が興味を持つのは日本人が日本人を演じるその裏返しであり、それはまた、妙に日本の美術シーンを言い当ててもいる。

僕たち日本人は美術をするうえで否応無しに欧米の美術／アートを下敷きにそれをしている。もし、僕のような美術作家がトロピカル三部作を美術／アートでやろうとすれば、欧米観の上に成り立つ美術／アートから見た日本の美術を僕たち日本人がするということになる。それは、後期印象派の一人であるゴッホが、浮世絵に興味を持ち自らの画風に取り入れたその絵に、日本人である僕たちが影響を受け、絵を描いたことに似ている。 しかし、それは随分前のこのとでもあるから、現在の日本の美術シーンを言い当てることはできないかもしれない。が、僕たちは欧米にあこがれ追いつき追い越せ、息を切らせて走ってきた。でも、行き着く先はいつもそのような欧米発、欧米印の日本着ではなかっただろうか。僕たちは本当にそこから抜け出すことができたのだろうか。

トロピカル三部作は、日本発、欧米経由、欧米印の日本着である。しかし、そこにはもう一つのねじれ“そのような飛行経路自体を演じきるということ”がある。

僕が思うに、当時、ポップという音楽をすること自体、欧米印になることでもあっただろうから、それをどこまでも保留していくものとしてその飛行経路自体を演じたのではないだろうか。

実際、細野はマーティン・デニーの「"Sayonara",The Japanese Farewell Songs」やヴァン・ダイク・パークスにノックアウトされてトロピカル三部作をつくることになったようだけれども、本当は完全にはノックアウトされていなかったのかもしれないと思えてくる。僕には細野が本質的に持っているだろうしたたかさがその三部作に見え隠れしているように思えて仕方がない。 本当の演技者／ミュージシャンが持つ、奥底に鋭く光るしたたかさ。そのしたたかさの裏には、欧米印の日本を建て前に、実はそんなもの信じちゃいないよと軽々と走り抜けていくようでもある。そして、そんなところに着地するつもりなんてないよと言わんばかりであるようにも思えてくる。 トロピカル三部作最後の作品『はらいそ／PARAISO』のラストに「はらいそ」という曲がある。そして、その曲の最後にこんなフレーズが入っている。

曲の最後、細野の走る足音が挿入されつつフェードアウトしていく。全ての音がなくなった後、再び細野の走る足音がフェードインして、僕たちの前で立ち止まったかのように、その足音が止まる。そして、僕たちに語りかけるように入る最後のフレーズ。

「この次は、モアベター（More Better）よ。」

細野はこれを最後にテクノサウンドを一気に加速、東京テクノポリスという幻想を掲げ、世界を相手にすることになる。

しかし、今はもう東京テクノポリスなんてものはない。それに、僕たちはそんな幻想に着地できないこともわかっている。それでも僕たちはどこかでそのモアベターな幻想を求めてもいる。

では、次にくるであろうモアベターな場所はどこにあるのか。細野がトロピカル三部作で見せた極上ポップを踏み台にして飛んでいったモアベターな場所。僕たちが求めているモアベターな場所。

それは、当然のように、トロピカル三部作から始まる裏返しの幻想を突き抜けた場所でなければならない。